

幼児教育の基礎・基本に関する考察(サ1報)

岸 井 勇 雄
(文 部 省)

1. 問 題

昭和62年12月24日、教育課程審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」が出され、63年内には、教育課程の国の基準である幼稚園教育要領が小・中・高の学習指導要領とともに改訂、告示される。

今次の改善は臨時教育審議会の答申をも受けているが、その端緒となったものは、元3期中央教育審議会教育内容等小委員会審議経過報告(58年11月15日)である。これには「今後特に重視されなければならない視点」として、(1)「自己教育力」の育成 (2)基礎・基本の徹底 (3)個性と創造性の伸長 (4)文化と伝統の尊重、があげられており、教育課程審議会の答申も「基礎的・基本的な内容を重視し」とされている。

こうした場合一般に「基礎・基本」とは教育内容に因って言われることが多く、初等普通教育においては特にR(読・書・算)及びいわゆる基本的生活習慣のしつけ等を示す場合が少なくない。幼児教育についての基礎・基本をも、そのような通念を論ずることがあれば、きわめて問題である。また、幼児教育は、人格形成の基礎とか、三つ子の魂百までもとか、枕詞のように使われるが、必ずしも内実を伴って理解されているとはいえない。こうした状況の中で、最も緊急かつ重要なことは、われわれが本来の幼児教育の在り方についてこれまで以上に本質的な考察を加え、幼児期とは何か、保育における基礎・基本とは何かということの追求を確実にすすめることであろう。教育内容論と一応切り離し、幼児の実態や成長・発達過程の観点から仮説を立てて論究するものである。

2. 考 察

個性の一生の前段階は、発生から種の進化の過程を繰り返すという生物学上の原則がある。僅か9か月の間に、母胎の中で人類進化の歴史が繰り返される。

出生後の成長・発達がまた、さながら人類発達の過程を踏むことに注目しなければならない。人類が文化を獲得するために、最も重要な条件は直立歩行であった。それまでは体重を支えることと体を移動することに使われてしまっていた4本の足のうち、2本が解放されて手となったのである。

物を掴む、振り回す、たたく、投げる、ちぎる、折

る、砕く、掘る、埋める、積む、崩す、立てる、倒す、というような作業が可能になった。木・土・石・水などの素材に取り組み、試行錯誤を繰り返しながら道具を作り、獲物を捕らえ、衣服を作り、住居を整えるに至った。数の概念についても、両手の自由の獲得と深いかわりがある。10進法の根拠は数学的なものではなく、両手の指の数を単位にしたと考えられることもその一つである。

こうした姿は、まさに遊びを中心とする幼児の生活にほうふつとさせる。この、人類発達の経過を乳幼児期に繰り返すという大原則は省略すると、種々の不都合が発生する。

未開社会における未熟な思考や素朴な感情による行動の繰り返しは、文明に至る必要の道程であった。現代の人間文化のすべては、先人たちの個人的・集団的な試行錯誤によって発見・創造されたものである。

この過程を体験することこそ、最も合理的な学習の道筋であろう。エルキメデスのエピソードにもあるように、現在の児童・生徒が教科学習の中で学習する事項も、本来は、興味・関心→探究→発見という、幼児が素朴な形で精いっぱい楽しむ営みと同質のものであったはずである。

もちろん現在の文化の総量は巨大で、人間の一生は短い。彷徨や失敗を最小限度にとどめて系統的に学習させなければ、現代社会に適応することも、より高度なものを創造することも困難である。しかし、だからといって、結果として成立した文化を学習させることだけに偏ると、教育は学習者の主体性を離れて、むしろその主体性の発揮を妨げることになる。現在の教育問題の重点の一つがここにあるのである。

われわれがしなければならないのは、幼児の人間としての原体験、いわば未開時代の人間が野山を走り回り、物を作り、ルールを生み出していったことにも通ずる、個人や集団の原体験を豊かに経験させることを土台にしたカリキュラムを編成することである。

幼児は、自然の環境の中に置かれると、分断されないうつたりした時間の中で好きな場所へ行き、興味あるものを発見してそれに集中する。多くは砂、土、泥、粘土、水、本片、木の葉、木の実などの自然の素材で、それとじり、いろいろと手を加えてその性質を確か

めようとする。それはすなわち感覚的かつ知的な探索である。あるいは道端で、勝手にしか通らない自動車に乗るのを楽しみに待つ。やっと車が来た時のとろろき。それが通り過ぎていく僅かの時間にむさぼるようにして見つめる。こうした中で「待つた」、集中力、観察力などが養われる。

時間を使って幼児をせまてたり、取り組むべき課題を次から次へと提示したのでは、このような自発的な探索活動やその成果は生まれてこないのである。

幼児たちは、こうした中で仲間とのかかわりを持ち、人とのかかわる力を徐々に養っていく。初めは仲間の存在に気づき、仲間のやっていることを模倣することによって、自分の遊びがよりうまくいくことを知る。

そのうち、一つの物の取り合いのようなことが起る。家庭の中ではいわゆる少子核家族で、子供は王様である。どんなに厳しい親でも、子供と菓子や玩具を取り合う親はいない。欲しいのは自分だけで、周囲の譲歩や好意によってその願望はかなえられて当然と思っている。それが仲間と争うことによって、誰もが一人一人願望や要求を持って生きていることを知る。

さらに、一つの物をみんなで取り合っていたのでは結局誰も使うことができないことを知る。何らかの方法で順番を決めれば、少しの我慢で確実に自分の使う番がくること、さらに、ルールを工夫してみんなを使えば、一人一独断して使う以上に楽しいことを知る。

実はこれこそ、人間社会のルールというものが生まれた過程の追体験なのである。こういう体験を十分にしたら子供は、ルールというものは、みんなの願望を実現するために作られたものだということを知り、ルールや、それを守ることに対してプラスのイメージを持って成長することができると。

校内暴力や家庭内暴力の発端が幼児期にあるとする意見の多くが、幼児に対する厳格なしつけを求め、例えば幼稚園でも朝礼を行い、先生の話を聞く時は不動の姿勢をとらせるようにすべきであるなどとしているのは、はたはた危険である。なぜならば、内閣府が起こした少年たちの生育歴を調べると、親の育児態度に問題があったことと併せて、幼児期に自己表現(自己発揮ないし自己実現)の足りなかった場合が多数を占めているからである。

大人の都合を「お約束」と称して押しつけたらすれば、幼児は約束とかルールとかいうものは、自分たちを抑圧するためにあると伴って感じ、マイナスのイメージを持つであろう。そうして育った子供が年頃になれば、それを打ち破って暴力的な自己発揮をするとか

いのである。「仲よく」「行儀よく」と言葉で強いるのではなく、幼児一人一人が十分に自己を發揮する中で葛藤場面に出づかり、自己をコントロールして仲よくすることや行儀よくすることの必然性やその効果を体験するような指導が必要なのである。

そのためには、幼児の自由な活動を保障しなければならない。彼らの遊びは次第に発展し、仲間とのかかわりが多く、深くなる。大型積み木で家や基地を作ったり、お店ごっこやパーティから、オペレッタや運動会に至るまで、それぞれが役目を決めて分担したり、積極的に助け合って事業を行うようになる。それは、一人一人でするより遙かにスケールの大きな喜びが得られることを体験するからである。

幼児たちは、こうした生活の中で、十分に未開時代をゆっくりと経て、着実に文明人になっていくのである。

人間の発達には先行経験を土台にして行われるのであって、途中を省略したり、順序を逆にしたりすれば、発達にゆがめられたり、逆行したりする。先行経験は個人によって異なるから、一人一人その時期にふさわしい発達課題があり、それを踏ま固めていかなければ幸福な人生を送る人格は育たない、というのが、ハヴァイガーネットやエリクソンのいう発達課題であろう。

ところがわが国で発達課題という場合、何歳児の何学期にはと、外から設定する画一的到達目標と考えられがちである。これでは一生の基礎となる主体的な自我の形成が行われるはずがなく、かえって主体性のない受動的な子供や、いわゆる落ちこぼれをつくり出す。社会の文化水準が向上したのだから、早くから幼児に文字や数量を教えるべきだとする考えがある。これは一見合理的に見えるが、これほど誤った考えはない。高層ビルを建てるのだから基礎工事は浅く早くというようなものである。文明が高度になればなるほど、その文明を維持、発展させるための土台づくりに時間をかけなければならないはずである。自己教育力といい、創造的学習主体といい、それが必要なことに異論を持つ人はいないのだが、それを育てる時間や方法に理解を持つ人が少ない。

文明が高度化しているという理由で幼児に文明を直接与えるのではなく、文明が高度化すればするほど、われわれは幼児たちに人類発達の歴史を踏ませ、文明創造の基幹を体験を十分に味わわせる必要があることを確認したい。真の意味の幼幼連携も、学習内容の難易度による相対的な分理ではなく、このことを共通に理解することによって初めて可能となるのである。